「金沢の文化的景観 城下町の伝統と文化」の保全・整備のための計画について

Planning for the Preservation and Maintenance of the “Cultural Landscape in Kanazawa. Tradition and Culture in the Castle Town.”

中谷　裕一郎（金沢市都市政策局歴史建造物整備課）　NAKATANI, Yuichiro
(Historic Landmark Preservation Section, Historic and Cultural Affairs Division, City Policy Planning Department, City of Kanazawa)

１．はじめに

平成22年（2010）２月に「金沢の文化的景観　城下町の伝統と文化」が重要文化的景観に選定された。これまでの選定事例をみると、その多くは、地域固有の生活や生業による農山村部の文化的景観が主である。そして、農山村部における文化的景観は、棚田や水郷などの景観が地域の生活や生業と一体化し、保護すべきものと保護のための手法が比較的明瞭である。

一方、本市のような都市部における選定は、宇治市に次いで２番目であり、特に本市の重要文化的景観選定区域は、金沢城跡周辺部の中心市街地を含むことから、歴史都市であると同時に現代に生きる都市としての活動（開発需要）も大きい状況にある。そして、様々な時代の建造物が混在しているため、文化的景観の価値を明らかにすることは容易ではなく、保護すべきものと保護のための手法を明確にすることは非常に困難であった。

このため、いかに生きた都市の文化財を磨き、将来に向けて望ましい文化的景観を保全・整備していくかが大きな課題であった。その課題を解決すべく、平成22～23年度にかけて、東京大学教授の西村幸夫先生を委員長とした学識者等による金沢市重要文化的景観整備計画検討委員会を設置し、金沢市重要文化的景観保全・整備計画を策定した。

以下に、「金沢の文化的景観　城下町の伝統と文化」の価値と、それを保全・整備するため策定した計画の概要や留意した点、及び現在の取組状況を述べる。

２．重要文化的景観「金沢の文化的景観 城下町の伝統と文化」の価値

金沢は藩政期に造られた城下町が基盤になっていることが、文化的景観として揺るがない大きな価値となっている。

現在の金沢の市街地は、加賀の一向宗の中心となった金沢御堂の門前に形成された寺内町を始まりとし、その後に形成された近世城下町を基盤としている。城下町金沢の都市構造は、寛文・延宝期（1661 ～ 81）にほぼ完成し、その形態は当時の同絵図で確認することができる。同絵図に示される街路網は小路に至るまで現状とほぼ一致し、城下町の町割や用水路は現在の市街地の街路や街区の構造を規定している。

藩政期には、３代藩主前田利常、５代綱紀によって漆工、金工、陶芸などの制作が奨励され、御細工所を設けて工芸品の芸術的な技術水準が高められたが、これらの多くは明治以降に旧藩士たちによって商業化され、現在も金沢の主要な生業となっている。

このように、「金沢の文化的景観 城下町の伝統と文化」は、城下町発展の各段階を投影した都市構造を現在まで継承し、街路網や用水路等の諸要素が現在の都市景観に反映されているのみならず、城下町が醸成した伝統と文化による生活文化や生業を中心とした伝統工芸等の店舗が独特の界隈性を生み出す貴重な文化的景観であるといえる。

なお、文化的景観における重要な構成要素（重要文化的景観の本質的な価値を示すもの）として、河川、用水、惣構跡、街路などの城下町の計画性を示す要素と金沢城跡、武家庭園群、歴史的建造物、文化施設（金沢21世紀美術館敷地など）など新たに造られた要素も含んだ文化的な象徴を特定している。

３．金沢市重要文化的景観保全整備計画

（１）保全整備における現状と課題

「金沢の文化的景観 城下町の伝統と文化」は、藩政期に由来する都市構造や伝統文化などを色濃く継承していることが特徴である一方で、本市は、石川県の県都であり都市開発需要が多い状況にある。このような開発は、都市機能を強化するが、金沢の文化的景観に大きく影響を与える要因となる。したがって、これらが相互に有機的な関係を保ちつつバランスよく共存させ、文化的景観の保全を図る必要があった。金沢市重要文化的景観整備計画検討委員会において、特に大きな課題として、選定区域内の都市的な開発需要がある地区で、古い町家等が残る一方で高層建築物が林立し、まちなみが不揃いに

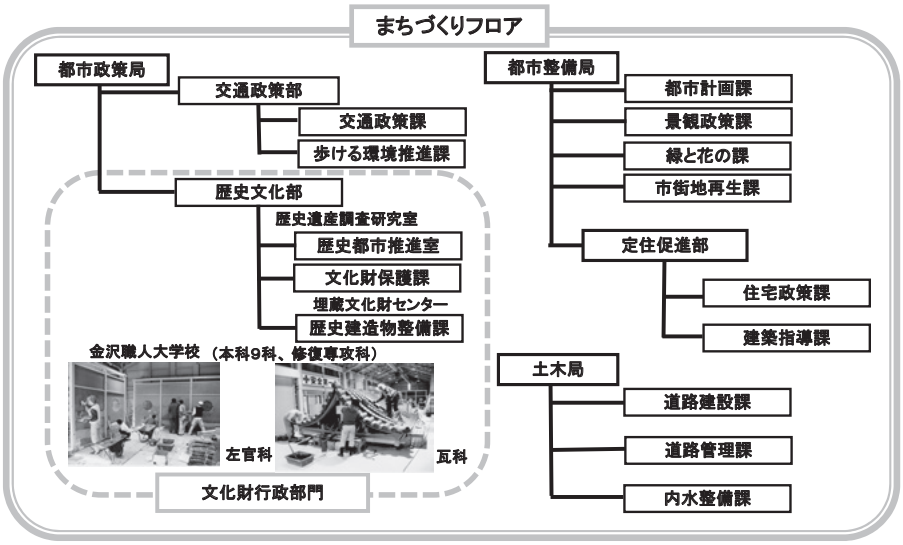

図１．重要文化的景観保全整備のための推進組織体制

なっていることが課題となった。このような課題を含め、今後、文化的景観への影響が大きいと考えられる主要な課題を以下の３つに整理した。

ア．都市構造の継承

惣構跡や用水、街路網など、藩政期に計画された有形の要素や都市形態が、現在の都市構造として継承され、都市景観に反映されている。しかし、高層建築物や駐車場、空家・空地の増加、自動車利用の増加による交通事情の変化などが影響し、今後、藩政期に由来する都市構造が失われていく可能性がある。

イ．生活・生業、界隈性の継承

生活スタイルの変化により、伝統的な祭礼行事・営みが失われつつあり、地区ごとの界隈性を保つことが難しくなりつつある。また、少子高齢化による伝統工芸の後継者不足や機械化による伝承技術の衰退、生活様式の変化による伝統工芸の需要の減少など、伝統的な生業が減退傾向にある。

ウ．都市建築の保存活用

金沢の生活・生業を育む場である歴史的建築物は、藩政期に由来する歴史性や場所性を継承しつつ築かれており、各時代の重層性を顕著に示す重要な要素である。しかし、都市の近代化により歴史的建築物が減少し、金沢固有の都市景観が失われつつある。

（２）重要文化的景観の保全整備の方策

それぞれの課題に対して、具体的な方策を設け、短期、中期、長期の実施スケジュールを盛り込んだ。具体的には、ア．都市構造の継承については、眺望景観や通りの景観に配慮した景観誘導、用水・惣構の保全整備など31の方策、イ．生活・生業、界隈性の継承については、コミュニティ空間保存活用事業や伝統文化、伝統工芸の継承に関連する事業など49の方策、ウ．都市建築の保存活用については、歴史的建築物の保存活用、高質な建築物の奨励など19の方策を設けた。このように様々なハード面、ソフト面の方策を組み合わせることで相乗効果を図ることとしている。

（３）重要文化的景観の保全・整備の推進

重要文化的景観の保全・整備の推進にあたっては、行政が文化的景観を活かしたまちづくりの方策を推進するだけではなく、市民や事業者が文化的景観について理解し、継承していくことが不可欠である。このため、市民、事業者、行政がそれぞれ必要な役割を担い、協働で保全・整備に取り組むこととしている。

また、庁内の推進体制として、都市政策局、経済局、都市整備局など関係部局が連携した「歴史都市推進プロジェクト」を開催しており、重要文化的景観の保全整備にあたっての各種方策の連携を図っている。さらに、重要文化的景観とまちづくりの整合を図るため、歴史文化部のほか、都市整備局及び土木局の関係課を「まちづくりフロア」として一体的に集中配置することにより、関係課の部局横断的な連携の強化を図っている。

４．重要文化的景観保全・整備計画の取組状況

重要文化的景観保全・整備計画における各方策について、現在の本市の主な取組状況を以下に述べる。

（１）都市構造の継承

重要文化的景観保全・整備計画において、特に、地域の特性に応じた高さ規制の見直し、誘導を課題として捉えており、現在、現行の高さ規制の見直しについて取り組んでいる。これまでに、学識者のほか、景観政策課や都市計画課等の関係部局を交えた研究会や地域住民との

図２．高さの不揃いによる景観的不調和

意見交換会を開催している。

研究会において、建築物の形態意匠や屋外広告物については、現行の景観法に基づく景観条例や屋外広告物条例により、十分な規制・誘導が図られており、高さ規制に課題があることを整理している。特に、重要文化的景観選定区域のほとんどは、金沢市景観計画において、伝統環境保存区域及び伝統環境調和区域に位置付けられており、伝統環境を保存または伝統環境と調和させる地区となっていることから、高層建築物が景観的不調和の要因となり、本市が目指す景観施策と整合しない可能性を、研究会は指摘している。

伝統環境を有する地区を保全していくことは、開発を進めることよりも難しく、開発にとって望まれない高さ規制について、一つひとつ、住民に十分理解を求めながら、解決していきたいと考える。

なお、これまでに全国的には、景観向上の目的で高さ制限を積極的に導入している都市もある。大澤昭彦氏著書の「高さ制限とまちづくり」おいて、京都市をはじめ全国的な都市における高さ制限を活用したまちづくりの事例が紹介されている。こうした取組は、高層建築物による紛争予防だけでなく、個々の建築物の質の向上や周辺景観との調和を図ることを通じて、市街地全体の価値を高めることを意図したものといえるであろう。少子高齢化、人口減少が続く中、都市の方向性を見据えた上で、開発（高層化）と保存（低層化）のメリハリをつけて、都市の質と価値を維持、向上させる必要があると考える。

（２）生活・生業、界隈性の継承

金沢の藩政期から伝えられ、積み重ねられてきた高度な手仕事の技能や知恵を受け継ぎ、次の世代に確実に継承していく必要がある。そして、多様な連携と新たな感性により伝統を発展させ、現代に生きる人々の心を動かす新しい工芸を創造し、金沢の魅力を高めていく必要がある。そのための方策の一つとして、金澤町家職人工房開設事業を実施している。かつて、まちなかには職人が集積し、職人のまちを形成していたように、再度まちなかでのものづくりを推進するため、町家を整備活用し、若手工芸作家等に工房として貸し出している。現在、金沢美術工芸大学を卒業した加賀象嵌（ぞうがん）の若手作家が、製作及び製品の販売を行い、高度な伝統技術の情報発信や新たな製品の製作にも取り組んでいる。高度な職人の作業風景を、一般市民や観光客が直に見ることで、その製品の価値の高さを理解できるとともに、金沢の文化性の高さを肌で感じることができる。

また、３代藩主利常、５代藩主綱紀が武士の嗜みとして奨励した能や茶道をはじめとする「嗜み」の文化は、現在も広く庶民に広がりをみせており、市民の生活に息づいている。この「嗜み」の文化を継承するため、加賀宝生こども塾や金沢茶道こども塾を開催し、金沢の伝統文化を次代に引き継ぐすそ野の拡大を図っている。

その他、伝統文化、伝統技術の継承など無形の要素について、今後も様々な施策を講じていくこととしている。

（３）都市建築の保存活用

金沢の都市を形成する建築物は、近世、近代、現代の建築が多種多様に存在しているが、その中でも、町家をはじめとする歴史的建築物は都市の記憶を残すものとして、文化的景観の重要な要素の一つである。特に本市では、市域内にある伝統的な構造、形態又は意匠を有する木造の建築物（寺院、神社、教会、その他これらに類する建築物を除く。）のうち、本市の歴史、伝統及び文化を伝える建築物で、建築基準法（昭和25年法律第201号）の施行の際に現存していたものを、金澤町家と定義付け、その保存と活用に取り組んでいる。

平成22年度から開始した金澤町家再生活用事業は、町家の外部修復に対する補助のほか、内部改修、内装改修にも補助を行うこととしている。また、平成25年４月には、「金澤町家の保全及び活用の推進に関する条例」を施行し、金澤町家の保全及び活用の推進に関する基本理念や、市、市民、所有者等及び事業者の責務、金澤町家の保存及び活用を図るための基本事項を規定している。

さらに、現在、金澤町家の総合情報発信拠点となる（仮称）金澤町家情報館整備事業に着手し、平成28年度の完成を目指している。機能及び活用法として、以下のコンセプトを掲げている。

①金澤町家の保存活用に関する市民の相談総合窓口機能。
②金澤町家の保存活用に関する多様な情報提供・発信機能。
③金澤町家の特徴、再生空間をモデルとして見せるとと

図３．活用事例；
金澤町家を貸家（シェアハウス）として活用

もに、建物を利用した文化体験や生活体験も行う空間体験。

④専門家、ＮＰＯ法人、事業者等の主体的な参画を促進し、弾力的な運営を図る。

これらの取組により、平成11年（1999）～平成19年（2007）にかけて年間約270棟以上滅失してきている町家が、近年、その滅失率が鈍化傾向にあり、むしろ、居住のほかレストランなどの店舗として活用されるなど小さな金澤町家ブームになってきている。

金沢の個性の一つである金澤町家にあっては、今後も保存活用する取組を積極的に進めていかなければならない。

（４）都市総体の魅力を高める

都市の景観という有形の要素を一つの器として捉えた時、その中でどのようなパフォーマンスが行われているかということが、その都市の豊かさや都市の個性を決定すると考えられる。前述した（１）～（３）をはじめとする本市の文化的景観の保全の取組により、都市総体としての魅力を高めることにつながるであろう。

なお、元市長であった山出 保氏は、「文化的景観の保全施策を総合化し、体系化して、その一つひとつを地道に実践していくことこそが、金沢の魅力につながる」（著書「金沢を歩く」より）としており、まさしく金沢市重要文化的景観保全・整備計画はその取組の一つと言える。

５．おわりに

都市の文化的景観を守る意義とは、歴史に裏付けされた地域固有の様々な文化的資産を継承し、地域住民が都市の記憶を共有できる場所を維持し続けていくことにある。文化を継承することにより、まちの魅力が高まり、多くの人々が集まり交流することによって、さらに新しい文化や生業の創造につながることが期待される。金沢21世紀美術館が、入館者数の多さなどから地方美術館の成功例としてあげられているが、美術館が建設された背景には、藩政期に由来する金沢固有の伝統文化や市民の中で醸成された美意識が根底にあったからこそではなかろうか。また、現在行っている現行の高さ規制の見直しの取組については、重要文化的景観の選定を受け、保全整備計画策定の過程で、その課題が顕在化したものであり、解決すべき課題と考える。

どの都市にも、地域固有の文化があり、それを背景として人々がつくり上げてきた固有の景観がある。景観の背景にあるものに価値を見出し、文化的景観として位置づけることで、景観に対する地域住民の意識が明確化され、このことにより地域の魅力が更に高まっていくものと考える。都市部における文化的景観は、保全整備計画のもと、これを着実に推進していくことが重要であり、これにより都市の価値が一層高まることが期待されるところである。

【文献】

１）山出保　(2014)「金沢を歩く」岩波書店
２）大澤昭彦　(2014)「高さ制限とまちづくり」学芸出版社
３）金沢市　(2012)「金沢市重要文化的景観保全・整備計画」
４）金沢市　(2014)「金沢市歴史的風致維持向上計画」

Abstract: In February 2010, “Cultural landscape in Kanazawa. Tradition and culture in the castle town.” was selected as an Important Cultural Landscape. Since the selected site includes the bustling downtown area around the remains of Kanazawa Castle, Kanazawa is in a state where it is a Historical City while also being very active as a modern city. For this reason, Kanazawa City, aspiring to a more desirable cultural landscape for the future, has formulated a plan to preserve and maintain important cultural landscapes in the city.

In this plan, what are considered to be the main issues significantly affecting cultural landscapes have been grouped into the following three categories: (1) succession of the city structure, (2) succession of lifestyles/occupations and neighborhoods, and (3) preservation and utilization of the city’s architecture. For each issue, concrete measures will be put in place and short-term, medium-term, and long-term schedules will be incorporated with the aim of preserving cultural landscapes.

Every city has its own region-specific culture and unique landscapes that have been created by the people of that culture. It is believed that by finding the value in what is in the background of a landscape and positioning it as a cultural landscape, local people will become more landscape-conscious and the landscape itself will become more attractive. Under the preservation and maintenance plan, it is important that cultural landscapes in urban areas continue to steadily promote this belief, and it is expected that a city’s value will be enhanced through this process.